

講演①

七世紀後半の国際関係と古代山城

講演者紹介

仁藤 敦史（にとう あつし）

早稲田大学第一文学部卒業。早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学。早稲田大学第一文学部助手、国立歴史民俗博物館助教授を経て、現在、国立歴史民俗博物館教授、総合研究大学院大学文化科学研究科教授併任。専門は日本古代史。博士（文学）。

講演① 「七世紀後半の国際関係と古代山城」

国立歴史民俗博物館教授 仁藤 敦史

こんにちは。昼休み明けの少し眠たい時間ですけれども、四〇分間お時間を借りてお話をさせていただきます。ただいまご紹介いただきました、国立歴史民俗博物館の仁藤と申します。よろしくお願いします。

私はこれまで山城そのものについての論考は発表はしてきませんでしたが、周辺を巡る外的条件といえますか、外交と行政については、レジュメ等に書きましたものをいくつか発表しております。最初のきっかけになりましたのは二〇〇五年の高安城での古代史サマーセミナー、そこで発表させていただいたのが、山城について考える契機になっております。

【はじめに】

本報告では、こうした議論を前提にして、古代の山城そのものの検討は、お二人控えている専門の先生にお任せしまして、私は築造とか維持管理に大きな要素となります外的条件、これについてお話をしたいと思います。



私のレジュメは13～22ページにわたるところになります。結論的なところは18ページ、ないしは末尾の21～22頁あたりにまとめておりますので、最後時間がなければそこを見ていただければと思います。一番今回お話をしたかったのは、なぜ山城体制が八世紀の初頭まで続いていたのかという疑問を自分なりに考えてみたいというところあります。

【白村江後の倭国の立場】

まず、白村江の敗戦後の倭国の状況として、唐の軍隊が旧百濟領に駐留しており、倭国に攻めてくる可能性がかなり後まで存続したと考えられます。レジュメに書きましたように、倭国を征伐するとか、唐人が図るところなどと表現されてるような、倭国への侵攻の現実的可能性が、天智朝末期までは少なくとも存在したのではないかと思います。高安城に塩や穀を集積した記事が、前後にあつたり、さらには百濟の兵法を導入してるとか、あるいは、17ページに資料を載せておきましたが、「彼の防人、驚駭みて射戦わん」とあるように中国からの使者を侵攻軍と誤解するような緊張状態がある。筑紫の防人が唐の使者を侵攻軍と誤解するような緊迫した状況が存在しました。

高安城は、畿内あるいは、大和・河内を単位とし、総領といわれる一国を超えたかなり広域を担当する地方行政官によって造営・管理されていたと考えられます。天智朝の当時においては、大宰と呼ばれる役所があり、その下に国宰と呼ばれる国司、そしてその下に評―五十戸という体制をかなり急速に作り上げようとし

ていました。六〇余州という国の上に、さらに大きな単位があったのではないかと考えられます。その広域行政単位と山城の整備が連動していると思います。白村江の敗戦以降、国造軍と呼ばれる古い国造（くにのみやつこ）から編成された軍隊から、唐の律令に基づいた軍団兵士制への転換が急速に進められていたと考えられます。

端的な証拠としては、白村江の戦いでの軍事動員は準備から渡海するまで、いろいろな事情があったにせよ数年かかっています。ところが、皆さんご存じの壬申の乱、これは大海人皇子が吉野から出て、そして大津の宮に進軍するまで一カ月かかっています。兵を集めるまでにほぼ半月、そしてもう半月で決戦に及ぶということになっていて、この時間の短縮というものは、この間に大幅に軍団兵士制的なものが整備され、あるいは動員体制が整備されたということの証拠ではないかと思っています。

さらに、この時期には古代の山城造営だけでなく近江に遷都しています。これも防衛的な側面が指摘されていますし、もともと都があった倭京という所には留守司が置かれて、そこには兵庫が置かれたという記載もあって、白村江以後はこういう防衛体制ないしは内政の整備に努めていた状況が見て取れます。

海外関係に目を転じるならば、唐・新羅は百済の滅亡後、高句麗征討に集中しますが、高句麗滅亡の後には新羅と唐との戦争が開始されます。13～14ページにあります年表を見ていただくと、現地勢力の登用による懐柔策を取りつつも、唐は百済・新羅に対して中国的な州県制の整備を進めます。新羅に対しては旧百済との和睦を強要し、新羅による百済併呑は認めませんでした。このことが後に唐と新羅との大きな論争・対立点になったわけですが、共通の敵である対高句麗戦の終了までは、この対立点は必ずしも顕在化しません

でした。高句麗戦の趨勢が決したあと、旧高句麗や旧百済の残存勢力をそれぞれ自己の勢力に抱き込みながら、新羅による対唐戦争が発生します。この対立は唐が朝鮮の征服を断念する六七七年まで継続します。その対立抗争は、天智朝を超えて、天武朝の初期まで及んでいることが、倭国の防衛体制を考える場合に重要ではないかと思っています。唐と新羅の抗争を背景に、天智期には倭国に対する取り込み政策として、旧高句麗や百済勢力も含めて、唐や新羅から外交使節団が頻繁に倭国にやって来ますが、倭国は必ずしも明瞭な、どっちに肩入れをするかについて明確な意思表示していません。通説では協調外交とか全方位外交とも評されるわけですが、私は、倭国内部には異なる外交路線の対立が存在したのではないかと思っています。以下、具体的に見て行きたいと思っています。

まず、山城体制の維持と関連する重要な論点としてここで話したいのは、唐との正式な国交回復はいつなのかという問題です。倭国・唐と新羅との国交回復時期を検討すると、新羅使や遣新羅使が行き来するのはいつからかということがまずは問題になるわけですが、新羅とは高句麗滅亡後の六六八年以降とすることに大きな異論はないと思います。ただ、中国と最終的にいつ講和したのかという問題を考える場合は、六六六年の遣唐使が「封禪の儀」へ参列するというのが一つのチャンスでしたし、六七〇年に高句麗が滅亡した時にそれをことごとく使いが行っているというのが二度目のチャンスでした。最終的には七〇一年の大宝の遣唐使が考えられ、この三回が倭国から主体的に中国と関係修復できる機会であったと考えられます。

ただ、六六六年の「封禪の儀」への参加、これは白村江の捕虜と留学生による参列と考えられ、おそらく

正式の使者ではないと思います。さらに二度目の高句麗平定の賀使についても、この時期はちょうど壬申の乱の直前でして、大友皇子がメインの時期でありました。近江朝廷の中心は大友皇子で、大海人皇子とか、中臣鎌足とか、天智天皇らは、それほど影響力を及ぼせない時期でした。このあと大友皇子は壬申の乱で敗北したことからすれば、唐と仲良くしようとするのはあくまで一時的な和平であった可能性があります。少なくとも壬申の乱以降、外交方針が新羅寄りに変わりますから、その点で一時的なものの可能性があると思います。結局、大宝の遣唐使というのが、以後も連続する正式な和平ではないか。これが山城体制の転換と密接に関連するというのが、前半の大きな結論です。

【天智期の外交】

それでは以下、天智期の外交を資料に則して見ていきますが、『善隣国宝記』と呼ばれる中世に作られた書物によると、天智三年にやって来た唐の使いですが、唐は高句麗征討に先立ち、戦後処理を考えたのですが、倭国のほうが難癖をつけて、これは天子の直接の使いではなく、百済へ派遣された將軍の私的な使者であることを口実にして追い返しております。すなわちこの段階には、唐使に対して積極的な国交回復の意思がなかったと考えられます。

翌年には、前年にいちゃもんをつけられたので、今度は天子の正式な使者が来たということで、大津京に入京させています。ただし、宇治の道では閼兵があったという記載がありますように、おそらく、これは唐

への示威行動であって、必ずしも熱烈歓迎ではなかったと思われます。この時、『懷風藻』には唐の使いが大友皇子の人相を見たという記載もあって、唐使と大友皇子の間には交流があった可能性が指摘できます。

天智四年、守君大石と坂合部連石積らを唐に遣わすという記載があります。通説ではこの記載が第五次の遣唐使と評価されていますが、しかし、よくよく見ますと、本文を注で補っているように記載にやや混乱が見られます。位階も、小錦・小山・大乙など、中途半端な位階の記載となっており、混乱した記載になっています。

この時の唐からの使者ですが、翌年の「封禪の会」に参加するための使者と通説的にはいわれていますが、ただ、帰国は一二月と書いてありますので、翌年の「封禪の会」には時間的に間に合わないということが指摘されております。遣唐使、すなわち国交回復の全権大使というふうにはちょっと考えづらくて、唐人を送る使い、あるいは百済からの捕虜の使いというような議論が提起されていて、その説が首肯されると思います。その根拠としては、この守君大石という人は元百済救援の將軍で、帰国記事がありません。小錦という曖昧な位階表記からも、唐の捕虜であったのではないかと考えられています。

天智四年に唐へ送られた使節のうち、坂合部連石積のみが天智六年に帰っています。守君大石の名前は記載がありません。渡唐した白雉四年以後に帰ってきたという記載がないことからすれば、彼は白雉四年から天智六年まで唐にいたと考えられます。このように『日本書紀』の記載は混乱があると言わざるを得ません。実際は、最後の二人、吉士と書いてある二人が行ったのではないかと思いますが、次に見える天智五年

の記載と勘案すると、唐へ行つたとする守君大石と唐の使人を送る坂合部連石積は、別の使節だったものをまとめて、『日本書紀』が誤解して、合わせて書いたのではないかと考えられます。

天智五年になりますと、『冊府元龜』と『旧唐書』に記載が見えます。天智五年の正月には、国名とか出發の場所を見ますと、東都から出發して倭国、新羅、百濟、高句麗等の諸蕃酋長がそれに従ったとあります。東都から出發したと書いてあるんですが、もう一つの『旧唐書』のほうは、劉仁軌という人が、新羅・百濟・耽羅・倭国の四国の酋長を連れて来たと書いてあつて、微妙に内容が違っています。すなわち、いずれも同じような内容ですが、耽羅と高句麗について記載に違いがあります。

白村江の戦いの時にも耽羅は関係したことは記載がありますし、おそらく一〇月二九日に東都を出たグループと、仁軌が連れて来たグループは別グループの可能性があるのでないかと考えられます。留学生の、先ほど出てきました坂合部連石積が東都にいて、彼らを倭国酋長として封禪に参加させて、その後帰国したと考えられます。従つて、この時の使者は、倭国と唐との戦争で捕虜になった人々や留学生らを、唐は正式な使者に仕立て上げたと解釈できます。天智三年以降、消極的対応から積極的対応に外交方針が転換されたとは、考えにくいのではないかと思います。同じような資料がいくつか存在しているのですが、耽羅をメインにしているものと高句麗をメインにしている資料の二系統があることから、このように考えられます。

次に、天武六年には、前年からの高句麗征討に関係していた百濟の鎮將劉仁願が、高句麗と日本が裏で連携をすることを阻止する使者として倭国にやって来ます。この時の記載には、「筑紫都督府」という見慣れ

ない名前があり、これは百済の鎮将が派遣した熊津都督府からの使者と対等な存在として筑紫都督府を位置づける意図があったと考えられます。都督府同士が対等に外交しているという意味で、あえてこういう記載がなされたのであり、同等・同格の対外的表記として使われたと推測されます。なお、この時の使者は四日間ですべています。筑紫の大宰府独自の判断により冷淡な対応がなされているのではないかと思います。

『日本書紀』には、白村江の戦いにおいて高句麗が倭国に救援兵を求めたという先例があります。前年には高句麗から実際に救援要請の使者も来ておりますので、唐は倭国が高句麗に援軍を送った先例を警戒していたのではないかと考えられます。反対に倭国も、高安城をはじめとする築城記事があるように、天智六年に防衛拠点を作っております。警戒態勢を維持しているということが言えるわけで、対高句麗戦の兵力集結というものを倭国は中国の懐柔的な意図とは別に脅威として認識している。外交記事と山城の整備というのは連動している可能性があるのではないかと思います。

天智七年になりますと、新羅使と遣新羅使が見えます。すなわち行く使者と帰ってくる使者ですが、新羅との外交が再開されます。御調船を送り和平を受け入れ、朝貢を求めています。九月一二日には高句麗の滅亡が確実になってきましたが、今回の使者は半島の主導権を狙う新羅の思惑により、新羅が唐と戦争を開始する前提として、高句麗の滅亡後における、唐・新羅による倭国侵攻への恐怖感を緩和するため、新羅と倭国の協調連携という働きかけを開始するもので、唐に対しては対立的に動くという反唐的立場を両国は共通点として持とうとしていたことになります。

しかしながら、新羅使に対する厚遇は『家伝』によると、ある人がこれを諫めたとの注目すべき記載があります。すなわち、この時期におそらく外交主導であろう中臣鎌足とか大海人皇子の親新羅的・反唐的な政策への反対論も根強くあったと推測されます。こういう方向に一〇〇%政府内が一致していたわけではなく、唐と新羅のどちらを支持するかという外交的な対立が存在したことがわかります。

次に天智八年になりますと、河内鯨らを唐に遣わす記事があります。通説では第六次遣唐使として評価されているものです。ただし、郭務棕の記事は、重複だろうといわれております。天智期の外交記事の多くは是歳条というかたちで出てきて、日時が不明な、かなり不正確なものです。

『三国史記』を見ますと「国家」、これは唐のことですが、「船舶を修理して、外には倭国を征伐するに託し、其の実は新羅を打たんと欲す」という記事が見られます。これは新羅が当時戦争状態に入るのは、翌年ですが、天智一〇年には「唐人の計るところ」ともあるように、前年からの倭国征討の準備を示すのではないかと考えられます。

天智九年には、唐による日本侵攻が現実化したこととの関係で、高句麗平定を賀すという名目で、倭国から唐に対して急ぎ使者が派遣されています。この時期の政権を見ますと、中臣鎌足が一〇月に死んでおり、天智八・九年には蘇我赤兄が筑紫の率となっていて、すでに大友皇子が近江朝廷方の中心になりつつあるの、そういう意味では、唐と親しくしようとする遣唐使であったと考えられます。

次に天智一〇年になりますが、天智一〇年には、三年前の六六八年に既に劉仁願というのは排除されてい

て、ここに劉仁願と出てくるのはちょっとおかしいのではないかという議論もありますが、唐からは、これは四年ぶりの使者です。天智六年に百済の熊津に使者を派遣しているのですが、ただ四日で帰国させたりするなど極めて消極的な対応だったこととは異なって、外交姿勢が少しずつ変化している様子が分かります。この時期において、百済の遺民と唐というのは、基本的に新羅が旧百済領を併呑しようとしているので、そういう意味では対新羅との関係では、旧百済領の維持という観点では一致をしています。

もしそうならば、日本の倭国の伝統的な外交的立場であります百済支援というのは、唐と一体的なもの、百済支援は唐支援というかたちで変質してきたのではないかと考えられます。この頃は旧高句麗の残存勢力と新羅、および旧百済の残存勢力と唐が、倭国へ積極的に外交攻勢をかけている時期に当たります。両者ができるだけ倭国を自分の味方に引き込みたいという時期になります。

この時には百済の三部使人を名乗る使者がやって来ますが、三部というのは百済の基本的な行政単位である五部制、東西南北に真ん中の中、これを入れて五部制というわけですが、そのうち西部・北部で反乱が起きていて、唐の支配下あったのは残りの東・南・中の三部しかないので、そこに属する百済人たちが唐の倭国に対する交渉を有利に運ぶため送り込まれてきたのではないかと考えられます。百済三部は、軍事援助も求めています。唐と百済三部使人が一緒に帰国していることからすれば、この時期、唐が熊津という場所に置いた都督府と百済三部使人というのはある意味一体、同じ方向の外交を働き掛けたのではないかと考えられます。

次に、一一月になると唐による更なる外交攻勢として、唐軍の倭人捕虜や亡命百済人を送還することが行われ、倭国の支持を取り付けようとしています。唐の意向としては、自分の側に味方になってほしいため、必ずしも威圧ではなく懐柔策をとります。対新羅外交への牽制という意味があつたと思います。ただし、唐本国ではなく都督府との直接的交渉であつて、なぜ懐柔策が行われているかという点、当時、唐は吐蕃という大きな国と戦っていて、そっちに力を取られていて、悪いことに吐蕃の戦いに大負けをします。従つて、なかなか大軍をこちらに援軍として回せない時期に、倭国が敵に回らないように、懐柔的な政策をしたのではないかと考えられます。『三国史記』に出てきますが、この時の軍の一部が倭国へやつて来たのではないかと考えられます。

二、〇〇〇人以上の人がやつて来てるので、冒頭で申し上げましたように、防人は倭国に唐軍が攻めて来たのではないかと驚いたと書いてあります。そういう意味では緊張状態が続いていると考えられます。

さらに、天智一〇年になりますと、新羅王に天智七年の使者よりも多くの賜物が与えられたということが出てきます。これは旧百済領を新羅が支配するということを倭国に黙認してもらおうという意向があつたのではないかと思います。高句麗滅亡後の唐・新羅の対立以降、この時期までは倭国は唐よりも新羅寄りの立場が出ております。しかし、このあと、倭国は、先ほど申し上げましたように、大友皇子が太政大臣になり、百済の亡命貴族を大量に官僚として登用しております。学者や軍事顧問に大量採用しており、大友皇子の側近は旧百済人だらけという状況で、そういう意味では大友皇子の外交政策が親百済、すなわち新羅勢力

から旧百濟領を守るという意味では、親唐的な立場を取ったことが推測されます。

これに対して、既に中臣鎌足は死んでしまい、大海人皇子も吉野に去ってしまうという状況が、まさにこの時期であり、このあと外交方針が変わっていくことになると思います。すなわち政権中枢部の変化によって外交方針が微妙に唐寄りになっていく時期なのではないかと思います。

天武元年になりますと、新羅を討つため倭国との軍事同盟を迫ってきた中国の高宗による国書が届きます。この時には二通の国書がもたらされ、おそらく二度目の国書が、天智が死んだあとに親唐的な立場を取る大友皇子に与えられたということが想定されます。筑紫大津の客館に安置して、あくまで入朝を認めなかった天智朝前半の外交方針とはかなり変わっています。天武元年には、郭務棕に対して甲冑、弓矢などの武器を与えています。これは、かなり中国に肩入れをした政策として認められます。唐との、いわば軍事的同盟の証として与えられたと解釈できます。

そういう意味では、新羅寄りに傾いていたものが、天智朝の末年、すなわち大友皇子の執政期には中国寄りに変わるといことが指摘でき、亡命百濟人たちに囲まれていた大友皇子が親百濟＝親唐的な立場に転換したことが推測されます。ただし、これ以降七〇一年の大宝の遣唐使まで唐との交渉は跡絶えます。これは唐の出先機関である熊津都督府の滅亡や、壬申の乱の敗北による大友皇子の失脚により、親百濟・唐的勢力が急速に力を失ったためと考えられます。しかしこの間、大宰・総領制および山城体制は存続します。再び親新羅派が台頭することにより、唐に対する緊張関係は天武期にも継続したと考えられます。

しかし持統朝には揺り戻しが来て、再び新羅とは緊張関係に入ります。天武の死去を新羅に伝えようとしたが、使者の地位を巡って争い、その役目を果たさず帰国したとか、新羅からの使者の地位が低いことや、朝貢の船が一隻だけであったことを非難して、献上物を返還しているように、持統期に入ると天武期の密接な関係とはやや異なる対応が両国でなされます。この転換は無視できないもので、やはり外交的な緊張関係、唐に対して緊張を持つのか、新羅に対して緊張を持つのかは微妙に揺れ動くのですが、全体としては対外的な緊張関係は大宝の遣唐使あたりまでは続くのではないかと考えられます。

【大宰総領と国宰】

それでは最後に、大宰・総領の話をしたと思いますが、もう時間がなくなってきましたのでかいつまんでお話をしたいと思います。大宰・総領制ですが、私見では臨時使者的な東国総領が、いわゆる大化改新の時に派遣されるんですが、本格化するのには白村江の敗戦後に、おそらくは全国的規模で、軍事動員を前提として大宰総領制が本格化したと考えます。持統五年の段階で、二九年前に筑紫の大宰府典がいたという記載がまずあります。さらには、熊津都督府と筑紫都督府が対等な関係で記載されています。そして、筑紫の大宰という用語や、吉備の国守という表現も見えています。

壬申の乱の時に出てくる記載で、大海人皇子が勝利したあとに難波の小郡宮で西国諸国の国司たちから、倉庫のカギや駅鈴・印を取り上げる。すなわち権限を剥奪したという記載が出てきますが、これは西日本の

平定を、彼らの帰服により確認するためにおこなったセレモニーではないかと思えます。律令成立期の国司（国宰）が必ずしも屯倉（みやけ）とか、正倉の管理権を有しておらず、むしろ上位の大宰とか総領と呼ばれる人がこういうものを管理しているという、そういう流れが見て取れるかと思えます。たとえば、大倭と河内の国境に置かれて大宝期まで存続した高安城について、畿内の田税を一括して集めたと書いてあったり、あるいは周防や筑紫の大宰には軍事物資を集めたとあるように、大宰総領は一貫して大きな軍事・財政権を有していたことが確認されます。

天武朝後半期になると、周防とか伊予にも新たに総領が見えます。そして、「大宰・国司皆遷任」とあるように、この時期から交代の期限とか昇進方法などが定まって、持統朝になると大宰総領と国司の併存というものが確認され、制度的に整備されてくると考えられます。

大宝令の直前になると、筑紫の総領とか吉備の総領、周防の総領などの名前が見えて、少なくとも西日本にはこうしたものが置かれたことが分かるかと思えます。最後のほうに総括をした表を掲載しておきましたけれども、筑紫・周防・伊予・吉備辺りは確実で、その配下に山城が含まれています。そして、可能性としては畿内とか東国などにも同じようなシステムが試行された可能性があると考えます。

この山城と大宰総領の関係を示すものとしては、大宰府が三つの城を管轄したとか、大宰府の役人が西海道諸国の稲を管理していることが見えています。

【おわりに】

このように、七世紀後半には広域行政組織として大宰総領の存在が確認され、大宰府が筑前の国を帯したと同じように、大宰の帯国制度が機能していたと考えられます。西日本において、筑紫・周防・伊予・吉備の四地区における大宰総領制の施行は山城の存続と関連して確実ではないかと思えます。畿内と東国においても正式な用語は見られませんが、高安城などとの関係において、天武天皇の信濃への遷都計画なども連動して、広域行政の単位が存在した可能性は高いと思います。

大宰総領が対外防衛において大きな意味を持っていたことについては、『日本書紀』によれば、壬申の乱の時に筑紫の大宰の兵を出せという募兵の使者に対して、募兵を拒絶した総領の回答に、筑紫の国は外敵を防ぐために城を造るということが述べられており、まさに大宰の設置目的がここに端的に表現されていると思います。最後早口になりましたが、以上でございます。ご静聴ありがとうございました。